

ひろば

Photo & News

編集・発行 ひろば編集委員会

6月15日号

一部 200円

追悼

前田俊彦

大きな茶碗

—前田俊彦さんを偲んで

井之川巨（原詩人主宰）

前田俊彦さん

あなたのお名前は

昔、僕の親父が使っていた

古い大きな茶碗のように懐かしい

あなたは共産党の村長で

瓢箪亭の主人で

三里塚「廃港」要求宣言の会代表で

「里の思想」を縦横に論じ

なによりもご禁制のドブ洛克造りの名人で

裁判で罰金刑を科せられたことは

広く人々の口にのりもてはやされました

国家から罪とされたそのドブ洛克を

「ひろば」の旗びらきの席でふるまわれ

僕もあなたの共犯になった気分ひたり

その日はとても愉快でした

あなたが石垣島白保で転倒して怪我をしたと聞き

その後、福岡のお宅で脑梗塞で倒れたと聞き

それでも瓢箪亭通信の再刊をめざして

ワープロ練習に励んでいると聞き

ひそかに心配したり安心したりしていたのでしたが

ついに春爛漫の夕べ、帰らぬ人となりました

しかも焼死という思いがけない結末で

前田俊彦さん

あなたのドブ洛克はじつにうまかった

それにも増してあなたの焼酎は絶品でした

あなたのお酌でぐっと二杯飲んだとき

なぜか死んだ親父と飲んだ気分になりました

悲報に接して今宵

僕は古女房を相手にあなたを偲び

大きな欠けた茶碗で無常の酒を飲みほします

一つの時代精神が倒れた

ひろば顧問 庄 幸司郎

前田俊彦さんとは、思いかえしてみると、生前とうとう一度もお会いする機会がなかった。なかつたが、まるで昔からお会いしていた方のように思えてならない。それほど親近感と存在感を、私は前田さんに感じていた。いつの間にか、私は「ひろば」の編集顧問になっていった。『いつの間にか』というのも変ないい方だが、親しくしている弁護士岡邦俊さんや同じ顧問の伊藤成彦さんとの関係からだろうか。いずれにしても、私は「ひろば」を通して長い年月を前田さんと間接につながってきたことになる。

たとえ「ひろば」の顧問でなくとも、『瓢鰻亭通信』の文章や、三里塚からドブロクに至る前田さんのたたかいを通しての発言・行動のすべては、私の心を魅きつけ、ひそかな応援団の一員であったことは間違いない。公権力の横暴に対して、すつくと正面から対峙

前田俊彦

(フォトニュースひろば13号 1985年9月号より)

公園をつくるな
むかし、私は“都市に公園をつくるな”ということを目指したことがある。いまこの主張に変わりはないが、その意味は“公園がなくてもいいような都市をつくれ”ということである。そして、私のこの主張に共鳴してくれた佐賀県の武雄市には、いまも公園がなく、いたるところに“ひろば”がある。

やはり、これももう昔と違っていいが、かつて新宿駅西口の地下は“ひろば”といわれていた。ところがベトナム戦争のころ主としてベ平連の仲間たちがそこで反戦討論会などをやって、政府はそれを弾圧する口実にここは“ひろば”ではなく“通路”であると主張したもので、以後はそこで人々が立話もできなくなった。

“公園”には境界があるけれども“ひろば”には境界がないのが常識である。つまり、“場”としての“空間”そのものに自由があるのである。わが「ひろば」も、人民解放運動のために境界のない“ひろば”にしたいものである。

自由人・革命家としての前田俊彦

ひろば顧問 樋口 篤三

前田さんは、身体も大きく頑健で大食家だったが、人間のスケールも大きかった。その『瓢鰻亭通信』は、秋田県横手市むのたけじ「たいまつ」、静岡県富士市の故甲田寿彦「蛙声通信」とともに「反権力を貫く在野ジャーナリスト」として、たかく評価されていた。

だが前田さんの真骨頂は革命家、しかも伝統的・新左翼をおおった「正統派」ではなく、無頼・自由人としていかなる権威、組織からも拘束されない生き方を貫いたことにある。手もとにある同通信第六期一号（七六年三月二〇日）のテーマは「革命のための対話」（一）である。

一九七七年、労働情報が創刊されたとき「樋口は革命のために死ねるか」と伝言があった。

同年初夏、風雲急を告げる三里塚に労働合宿所がつけられるや、六八歳とこの直ちに住みつき、その「訴え」

で高らかに宣言した。曰く「人格的には毛沢東や吉田松陰におよばないまでも、志においては湖南省農民講習所や松下村塾にけつしておとらない合宿所に」と（労働情報・七七年七月十五日第4号）

太平洋では、毎朝机にすわって、持ち込んだ「世界」「朝日ジャーナル」のポーランド「連帯」やチェコ・スロバキヤ市民革命、ハベルの論文などを読み、おおきな字で革命、労働者階級、社会主義と書いていた。

まだまだ生き、戦うとばかり三食を私の倍以上食った。一七〇歳をすぎても正月の餅を二〇個も食っていた。そして恋をして新幹線で岡山まで会いに行った。

ミッドウェイ付近で、またも脳出血で意識不明となり、もう駄目かと観念したが広島市民病院で緊急手術をしたら不死鳥のように回復し、翌朝訪ねたら起き上がろうとした。船の仲間たちと、もう一度旅へと話していたら、天界へと旅立ってしまった。

この直後、前田さんの強い希望で日本革命のための「革命百人衆」が提起された。いざ本番と言う前に、不発に終わったのは残念だった。

ピースボートは八三年の第一回（サイパン・テニアンなど）と一緒に乗り、世界一周（九一年十一月～九二年一月）では、脳溢血で右手右足が、そしてロレッツがままならないが、水先案内人として乗船した。チュニスでは、パレスチナの子供たちの熱烈歓迎に、心から感動していた。キューバ・ハバナの革命広場、ニカラグアのサンディニスタ革命コースには、私が車椅子をおして参加したが、感無量のようだった。

追悼—前田俊彦さん

ひろば顧問 伊藤成彦

前田俊彦さんがこんな形で突然去られて茫然としている。ここしばらく前田さんとお会いする機会がなかった。前田さんと最後にゆっくり話したのは数年前の夏、「ひろば」の箱根合宿の時だった。前田さんは「お上」の非理に対してどこまでも抗うという点で、遠くから見るといかめしい人だったが、仲間に対しては本当に温かく優しい人だった。

前田さんのことで忘れ難いのは、以前に前田さんが『瓢鰻亭通信』に連載していたエッセイで、とくに「経綸」と「道理」について説いた文章だ。今その文章が手元がないので記憶で書くほかはないが、「経綸」とは明治二十年の中江兆民の著書『三酔人経綸問答』の「経綸」で、現在ではもう死語となっているのかワープロには入っていない。もともとは「天下の経綸」という具合にに使われた言葉だが、前田さんは

の建設やどぶろく造りや、日高六郎さんや福富節男さんたちと一緒に訪中旅行や、挙げればきりないかずかずの行動をとるに、その人柄にひかれ続けてきました。

前田さんの思想を一口で語ることは私にはできません。前田さんは『続瓢鰻亭通信』（土筆社）のあとがきで、この『通信』で「ころざしたものは」「つまるどころ権力と権威の否定ではない。しかしそれは他を啓蒙するのではなく、私自身の中の権力的なるもの權威的なるもの否定でなければならぬと思っています」と書かれています。確かにそうなのでしょうが、それを足場とした上で前田さんの様々な主張は、これからじっくりと検討しなおされるべきものでしょう。



「経綸」を世界の全体を視野に収めながら人類の未来を構想する意味に使っていたと思う。また「道理」については、前田さんはこの言葉を「論理」に対する言葉として使っていたように思う。人の心を本当に動かすことができ

前田俊彦さんの逝去を悼む

市民の意見30の会・東京 吉川勇一

闘病と『瓢鰻亭通信』の復刊に意欲を燃やしていた前田俊彦さんが、自宅の火災の中で不慮の死を遂げられたことは、大きなショックでした。熱田一さんなど三里塚反対同盟の人々や福富節男さんと、とりあえず、九州豊津町での通夜と葬儀に加わりましたが、悲しみと無念の思いは去らず、まだ落ち着きません。

はさみとスクラップブックをもって、毎日切り抜きに余念がなかったという

るのは、「論理」ではなく「道理」だというのが前田さんの主張だった。冷戦が終焉したにもかかわらず、思想的に混乱の極にある今の日本で求められているのは、まさに「経綸」であり「道理」であろう。絶えず根源を見つめて、深く考える人であった前田さんが書き残したものを、前田さんが突然去ってしまった今、改めて読み返してみたいと思う。

最近の前田さんには、世界と日本の現状について言いたいこと、書きたいことがつもっていたに違いありません。数えれば前田さんと初めてお会いしてから二七年になります。神楽坂上、赤城神社の脇にあった狭い初期のベ平連事務所、「べ何とかという運動の事務所はここかの？」と入ってきた前田さんの姿が、今でも目に浮かびます。それ以後、ベトナム反戦運動で、三里塚闘争で、あるいは「三里塚瓢鰻亭」

前田俊彦さんの不屈不滅の魂を受けつこう

札幌 花崎泉平

初秋の時期に、東京で「前田さんを偲ぶ集まり」を皆さんと相談して開きたいと思っています。また三里塚以降の『瓢鰻亭通信』を『続通信』として、書物にまとめて出版できないかとも考えています。そうしたことを経

前田俊彦さんの焼死を聞いて心の平静を失った。通夜、葬儀に参列するつもりだったが、結果として行けなかった。このところ毎年一度は九州へ行くチャンスに恵まれ、そのつど入所中の施設へ前田さんをたずね、「不屈」という言葉はこういう在り方を言うのだと感

じ入る姿勢に接してきた。昨秋、完成直前の新居を、賤さんに案内していただいて俊彦さんと一緒に見に行き、今秋、その新居でお会いするのをたのみにしていた。

前田さんからこうむった思想的恩恵を、私自身の言葉となじませつつ世の中に伝える仕事をと心の準備をし始めていた矢先だった。一九七〇年以後の私の歩んできた道は、前田さん抜きでは考えられない。いや、私は前田さんのように生きたいとねがって来たのだと、いま、ふりかえってたしかめることができる。かならずしも、この言葉どおりに自覚していたわけではないけ

れども。

前田さんと三里塚の瓢箪亭で何十時間も二人で膝をつきあわせて話し込んだこと、一九六九年六月、札幌での平連の大デモ解散直後、学生たちが道庁の庭で日の丸と道旗を焼いた事件の際のことなどが思い出される。前田さんはそれを見て、「反安保の元年、北海道の元年じゃ」と言ってくれた。たくさんの思い出があり、たくさんの言葉が胸によみがえり、私にとって「恋人」のような人を失ったという喪失感からぬけきれないでいる。なかでも、物書きの私にとって忘れることのできないいましめは、「名を青史に残すとか、千載に残るものを書くとかを望んではならん。お互いもっと根本的に考えてみようではないか」という呼びかけとして、ものは書かねばならんのじゃ」という言葉である。一切の権威を、それこそ根本的に否定し、ピープルとしてのピープルに徹して生きた前田俊彦の、不屈不滅の魂をわがちあい、受けつこうではないか。

サヨナラ前田さん

福岡 石崎 昭 哲

前田俊彦さん。突然亡くなられたという衝撃的な報せから三週間ばかりが経ちました。あなたの事を思い出すと悲しくなるので、出来るだけ考えないようにしているのですが、どうしても面影が脳裏を去りません。

初めてお会いしたのは一九六九年三月末、福岡ベ平連の集会でした。あなたを連れて来られた小田実さんが、「おもしろいオッサンです」といって紹介し、飛び入りの発言をききました。「日本の敗戦記念日は八月十五日ではなく南京大虐殺の十二月十五日である」という話だったと記憶しています。この集会はベ平連全国キャラバンの始まりの集会で、そのまま用意した貸し切りバスに乗り込み、若者たちと一緒に九州キャラバンに出かけ大村収容所の所長に直接談判し抗議したという報せにはビックリしたものです。全然申し込みなどされてなかったものですから。

それ以来福岡ベ平連にとっては「飛入りの前田さん」となりました。あげればキリがありませんが、前田さんにビックリさせられたあとはいつもさわやかさが残りました。前田さんの衰えぬ行動力と優しさの故でしょうか。

前田俊彦さん。あなたはあの世でいままはどうお過ごしですか。天国で山羊の乳をのみながらミジンコを飼育し、おくれた原稿の埋め合わせをしている処ですか、それとも地獄で鬼どもを相手に「志の自由と魂の平等」を説いておられるのですか……どう考えてみてもどちらもあなたにはそぐいません。前田さんの思想は矛盾に満ちた現世にあつてこそ、その光を存分に発揮するものだと思えます。抑圧、隸属、弾圧のあるところにこそ自由と平等を熱くほく説く前田さんの存在感が一際大きく、骨太く、どっしりと感じられました。

前田俊彦さん。私はまだもう少し現世で頑張るつもりです。いつかあの世で会った時は、またビックリさせられながら議論しましょう。テーマは「女

懐かしの『ホラ話』

松下竜一

「小田実がうちに来るんで、あなたを紹介したいと思うんじゃないか、出てこんか」ヒョーマン亭主人からの電話で誘われたのはいつ頃のことだったろうか。確か一九七二年秋に小倉で上野英信さんが主催して下さった私の『風成の女たち』の出版記念会の際が初対面だったはずだから、その翌年くらいのことかと思う。（このときはヒョーマン亭さん、森崎和江さんなどそうそうたるメンバーが揃ったのだが、それは上野さんの声がかかりで集まったのであり、主人公の私は誰とも初対面という珍妙な出版記念会だった）

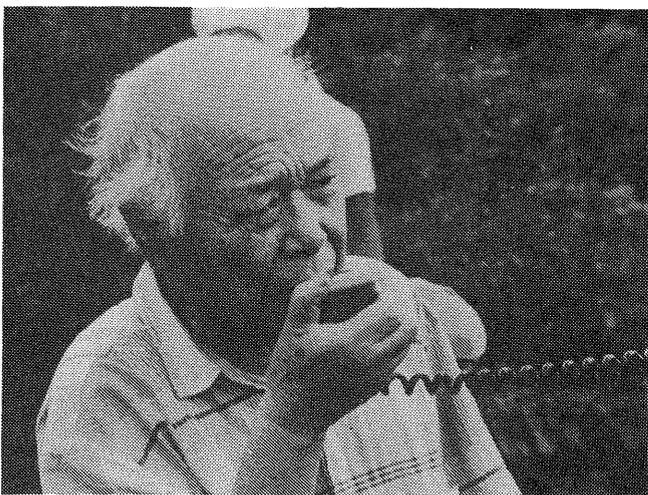
私の住む大分県中津から福岡県の豊津へは電車を乗り継いで小一時間かかる。駆けつけて紹介されたとき、小田

性解放について前田さんの理解」というのは如何なものでしょうか。今はただただ安らかにとひたすら祈るのみです。（「統一」より転載）

さんは意外そうな表情で「なんだ、そんなに小さくないじゃないか」といって笑った。初対面の挨拶にしては妙な言葉だが、説明を聞かされて私もふきだしてしまった。例によってヒョーマン亭さんの『ホラ話』が伏線にあったのだ。

「いまから来る松下という男は、肝っ玉はおおきいんじゃないか、ちっちゃい男でな。おれの太ももほどこかないんよ」といって、あぐらをかいたおのが太ももをピシャピシャ叩いてみせたそう。

確かに当時の私の体重は四三キログラムという貧弱ぶりだったが、まさかヒョーマン亭さんの太もも並の身体とすることはあるまい。小田さんが思わ



ず「そんなに小さくないじゃないか」と第一声を発したのも当然だろう。ヒョーマン亭さんがあの口調で語る豪放な『ホラ話』ほど楽しいものはない。御本人は別に『ホラ話』のつもりはなくても、私などには壮大なる『ホラ話』と聞こえてしまうのは、やはり人間としての器の大きさの違いというものであつたらう。

あんな『ホラ話』を聞かせてくれる人は、もういない。

前田さんの思い出

吉四六劇団

野呂祐吉

はじめにお逢いしたのは、松下竜一さんが豊前火力発電所建設に反対して近くの公会堂で第一回の集会を開いた夜の交流会のこと、松下邸へ近くの池を干したからと大きな鯉をさばいて大皿に盛りご馳走にあずかった時、泥ぬきの時間がなかったのか、泥臭かったのが思い出される。巨体をゆすり呵大笑される姿に豪放磊落なお人柄も感じた。その後「瓢鰻亭通信」の熱心な読者となり「里の思想」について多くを教えられた。

豊津の旧居へお伺いしたのは、三里塚へ移住されて間もなくの夏、松下、上野英信、安部能文と私とで半日語り合った。その時私は「私の住む野津町には運動も闘いもない、三里塚で生きたい」と言うと同座に「今の三里塚にはどこからでも、誰でも集まる、何もない所で頑張ることも必要だよ」と悟された。

炎のような生き方だった

三里塚芝山連合空港反対同盟代表世話人

石井

武

前田さんと知り合ったのは、そう前田さんが合宿所に来てからだよな。前田さんが、自然薯が好きで、よくおらいに来て「余ったのをくんねえか」「ああ持ってけや」でよく会うようになった。その頃は、こう言っちゃ何だが、ちょっと変わったじいさんという感じだったが、いつか鉄塔共有化運動のときで、前田さんと九州へ一緒に行ったことがあって、その時九州の人

大地におけるところの主人公は、ここにおけるところの主権者は反対同盟であり、この主権者であるところの反対同盟にこれをリードしよう、リーダーシップを確定しようとするいかなる党派といえども、これは国家権力の反対同盟に対する侵略を拒否するのと同じような意味において、反対同盟はこれを拒否する。あくまでも、この三里塚におけるところの主権者は反対同盟農民である。その闘いを我々は更に更に大きく進めていかなければならない。

前田 俊彦

(10.14 三里塚現地集会発言より)

前田さんを思い三里塚を思い続けて九一年の夏祭りにはじめて三里塚で公演出来たのも、ご縁だったと思う。病に倒れたことを知りながら、多忙に追われていたが、九二年十二月、豊津中央公民館での吉四六劇団公演が実現し、前夜の交流会、当日の公演を観て下さり「よかった、楽しかった、頑張れ」と喜んで頂き、帰りに新邸を拝見、リハビリの様子を逐一説明され、元気なお姿に安心をした。



痛恨の思いが永遠のお別れとなったのが、今年四月十五日、近くの豊津百姓館での百姓密談会に出席し、会議前に訪ねようか、いや会議を成功させてからにしようかと半徹夜の密談会。翌朝、徹夜に弱い私は一瞬ためらい、六月に再度百姓館に公演があるのでその時に、と帰宅したら留守番電話に「計報」。どんなに疲れていても、すぐ近くへ来たのだから訪ねるべきだったと悔いは残る。その償いに、前田さんの反骨を引き継いで、里の思想に徹し、吉四六芝居に生かし、大変の時代を生きようと思う。安らかに眠りください。

達、大学の先生までが、「前田さん、前田さん」と慕っていた。それを見て「ああ前田さんとはたいした人なんだな」と思うようになった。

前田さんというのは、付き合ってみると、何か非常にひとなつこいというのか、人との付き合いでも誰とでもよく付き合っただし、またそれが何か包容力というか、徳というのか、そういう感じがあったから、前田さんについて同盟の人らも、青行でも、かあちゃん

忘れられない、少年のような目の輝き

三里塚闘争に連帯する会

上坂 喜美

瓢鰻亭で倒れ、九州に帰って療養しておられた前田さんを、行橋市の小さい病院に見舞ったのは、いつだったでしょう。反対同盟の若い仲間達も一緒でした。私達を迎えた前田さんは、早速、松葉杖を手に、病院の階段を上

らでも誰も悪く言う人はいないな。当時青行も裁判で厳しい時だったが、瓢鰻亭でよく話してて、青行もそうとう力つけられたところがあったと思うよ。それでも、生き方は燃え盛る炎のような感じだったよな。病気で倒れたあとも何度か会ったが、動かなくなったら手を「こら、こら」とたたきながら何かしようとしてたし、あまり使わないうでいた左手を一生懸命動かして、字を書いたり頑張っていたのが印象的だった。炎のような生き方だったから、炎の中という象徴的な最期だったんじゃないかな。

その後、医者もびっくりするような回復ぶり、北海道、それから三里塚の現地まで足を運ぶまでになった前田さんでしたが、ピースポートで外国に

出かけてまた倒れたと聞いては、びっくりするやら、なんと無謀なことをと思うやらしたものでした。

門司の病院に見舞ったのはその後だったでしょうか。その時も、顔を見るとすぐ、不自由な手で室内履きの靴に履き変え、車椅子でリハビリの部屋に案内してくれたのでした。やはり言葉はどうにもならず、ひざをたたいて悔しがる前田さんでしたけど、自分の回復ぶりを見せたかったのでしょうか。

そして、自宅改築の間、病院に入っ

三里塚に惚れこんで

工人社 白川真澄

前田さんに初めてお会いしたのは、新宿の喫茶店「らんさん」であった。

一七年前の春のことである。力づくでの開港が企まれ三里塚が風雲急を告げる時期で、知識人・文化人を結集して三里塚闘争を支える世論形成を行う戦線づくりが相談されていた。いいだももさんの提案であったと思うが、前田さんにその中心に座ってもらおうとい

ているという前田さんが、もう帰っている頃かな、一度また顔を見に行かねばと、何よりシンポの事も報告したいしと、思っていた矢先の計報でした。

前かがみの姿勢で、でも顔だけはしっかりとあげて、「オオッ」とベットの土で迎えてくれたあの笑顔、年長の前田さんに失礼な言い方も知れませんが、あの少年のような目の輝きが、今も忘れられません。いつも前だけを向いて歩いているような前田さんでした。

うことで、その旨をお願いした。

その時は「それは大変なことじゃ。うーん」と言われただけであったが、その意味は後になって分かった。数カ月後に三里塚廃港要求宣言の会が、代表が前田さん、事務局長が鎌田慧さんという顔触れでスタートし、事務所は床が抜け落ちそうな建て替え前の新日本文学会館に置かれた。ところが、ほ



どなく前田さんは三里塚の地に住みつき、そこに骨を埋めたいと言いつき、私達を驚かせた。

これが一つの機縁になって、翌年の春には労農合宿所が建設され、前田さんはそこに移り住まれた。

前田さんは、三里塚の農民と闘争に「惚れ込んだ」のだと、私は思う。多かれ少なかれ三里塚に「惚れ込んだ」ことが、私達を管制塔占拠を頂点とするたたかいに駆り立てた。だが、前田さんの「惚れ込み」よりは、際だっていた。前田さんにとって三里塚は、知識人風に「叙述」するものではなく、人間の生きざまとして主体的に「陳述」すべきものであったにちがいない。

病に倒れたじいさんと

三里塚闘争連帯労農合宿所

吉澤 茂

「吉澤くんか、ちょっと来てくれんか」。こんな電話が瓢鰻亭から合宿所に掛かってきたのは、ちょうど私がその日の昼食のおかずにと天ぷらを揚げているときだった。

「五分くらいしたら、すぐに行きますので」と言うと、「いやあ、すぐに」と言うと、少しむせたようになって、何か苦しそうである。とりあえず、ガスの火を止めて瓢鰻亭にかけつけると、顔面蒼白で、ゴホゴホと咳き込みが激しい。

これが一九八五年一月十一日の出来事であり（一過性脳虚血症という病名だった）、この日から「じいさんの闘病生活」が始まった。

病気との付き合い方は人によってそれぞれであろうが、じいさんの場合、やはり「病に伏す」というよりは、「病に立ち向かう」というタイプだった。

リハビリはもちろんのこと、

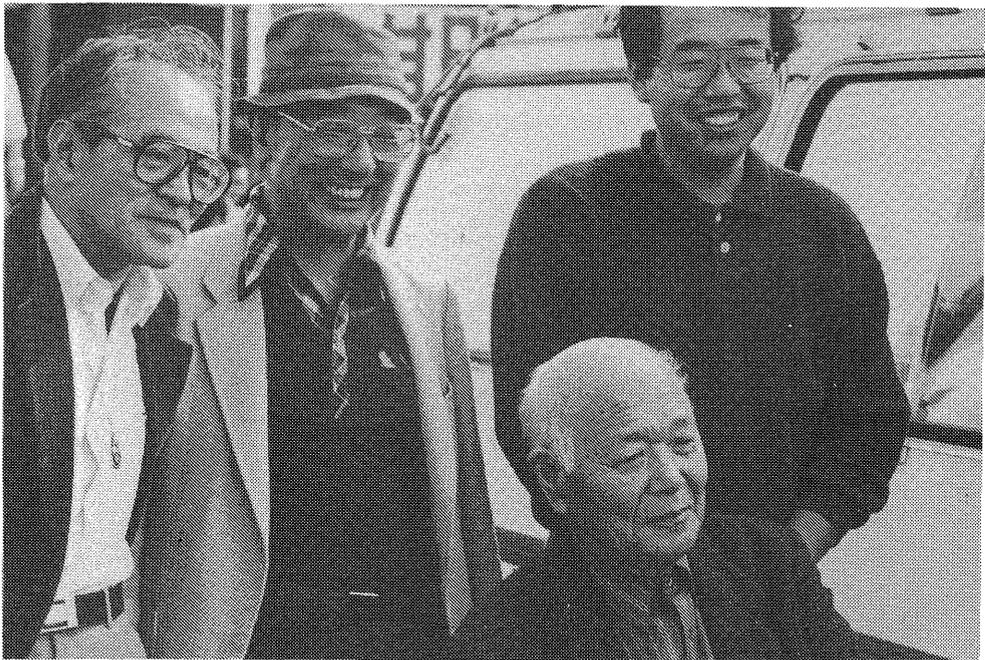
退院してからは、「PP21」の企画で北海道の二風谷（八九年）、「ピースポート」で世界へ（九〇年）と、高齢で大病を抱えていた人間のエネルギーとしては驚くべきものだった。

何がじいさんを急き立てていたのであろうか。

じいさんの写真には、睨みつけるような眼光、叱りつけるような視線を投げ掛けているものが多い。そしてリハビリが始まってからは、自らの膝を握りこぶしでたたいていた。不甲斐なきへの叱責であったのであろうか。

八三年の人生、悔いは色々とあったろうが、「自分の好きに生きた人生」であったと思う。

結局、「病」とはうまく付き合うというよりは、「自分の意



志」に「病」を無理矢理沿わせていたのではないか。

畳の上で死ぬる必要なし。そんなじいさんの言葉が聞こえて来る。

いるだけで意味のある人だった

北村 小夜

前田さんの言動には共鳴することが多かったが、特に「自分で呑む酒は自分でつくる」が気に入った。私も何度か試みた。少々できが悪くても実に気分がよかった。

前田さんのこの思想は「自分の食べるものは自分で作る」につながるものであった。

しかし私は、酒税法で禁じられている酒には気まぐれながら幾度も挑戦したが、他の食物については極めて無節

操であった。それが気がひけるものだから、前田さんとは幾度も親しく話をする機会があったけれど近寄らずじまいであった。惜しいことをしたとも思うが、そこにいるだけで意味のある人であった。

追悼

新人文学編集長

山本 リエ

前田俊彦さんの急死を知り、大きなショックを受けました。

農民のため、戦前、戦中の思想弾圧の中、獄中の内外で闘い、さらに戦後、村の改革に、そしてかの三里塚闘争に身を挺して支配権力と闘った巨人の業

績は甚大であります。
深く哀悼の意を表します。

思い出

昨年の六月、北九州に行った折に、夫と二人、二女の賤さんのご案内で入院中の前田俊彦さんをお尋ねする事が出来ました。

丁度午後のリハビリ時間で、患者さん達が大きな輪になって、ゲームのような事をしていましたが、前田さんだけは広い部屋の片隅で、皆に背をむけて本を読んでいらっしやいました。そのすねた子供のような格好が反骨の土らしく、何ともほゞえましく印象的でした。

ロビーで暫くお話をし、日記帳など拝見しましたが、不自由な右手をかばって左手で書かれた文字の美しさに、並々ならぬものを感じました。
毎日届く一抱えもある郵便物に目を通し、丹念に新聞切抜きをされるという事で、「早く買ってきてくれなきゃファイルが足りんじゃないか」と賤さんに甘えたり、顔を赤らめはにかむ様

荒川区

押田 ツル

に話されるご様子は、まるで初々しい少年そのもので、生涯を通じ常に真直ぐで新鮮な影響を多くの人々に与え続けてこられた偉大な方の一面に触れた思いで、一日も早くお元氣になられる様に、祈らずにはおられませんでした。
固い握手でお別れしての帰り道、賤さんがぼつりと「『女性差別』と男を

世の無情を思う

火事の前後、豊津の前田さん宅を友人とともに訪問し、夕食をごちそうになりました。

翌日、娘さんの賤さんが経営する「ひまわり書店」に、異常を告げる第一報の電話が入った時、たまたま私もその場に居合わせました。すぐに車で豊津に向かいました。私が着くのと同時に消防署員の方が駆け込んでしまし

福岡県築上郡

宗

裕

た。手近にあった角材で署員の人と二人して、前田さんの居室の戸をぶちやぶると、家屋内より火炎が吹き出し、素人目にも手のつけようのないことが判りました。
後はなすすべもなく、ただ消火活動を見守るだけ。前田さんの安否が気になります。屋内にいた可能性が高いとはいえ、はっきりと確認が取れるまで



は、もしかしたらどこか別の場所から、ひよいと前田さんの姿が現れるのではと……

昨日まであんなにお元気だった前田さんが今日はもういない。つくづく世の無常を思い知らされました。

私が前田さんに出会ったのは十年ほど前のことです。そのころは豊津の鰻亭に三里塚からたまに戻る前田さんをつかまえて、話を聞かせてもらうのが何よりも楽しみでした。

闘病生活に入られてからは、さらに身近に前田さんに接することができま

父のリハビリ、私のリハビリ

前田 賤

一九八九年正月五日、父は脳梗塞で倒れ、一命はとり止めたものの右半身は動かず、言語をも失ってしまいました。当時、主治医は脳の断層写真を観る限りでは、回復はせいぜい日常生活をなんとかこなすくらいで、著作活動はまず望めず、論理的な思考の復活はあり得ないとの判断でした。

あり得ないと言われればそれは咎はないと思ってしまう私は、以来父のリハビリにつき合うこととなり、中でも失くした言葉をとり戻す過程は、大変興深く父のものの考え方、捉え方、極言すれば父そのものを知る場面であったように思えるのです。

ある日、言語回復訓練で療養士が一

した。言葉が不自由になられ会話の量は少なくなりましたが、不屈の精神で病に立ち向かう姿からは、さらに多くのもの、言葉以上のものを教えられました。現在、残された仲間とともに残された原稿をもとに「瓢鰻亭通信」の終刊号を発行すべく準備中です。これが最後のお手伝いになります。私なりに前田さんを見送らせていただく様な気持ちで取り組んでおります。

前田さん安らかにお休み下さい。

前田さんの思い出

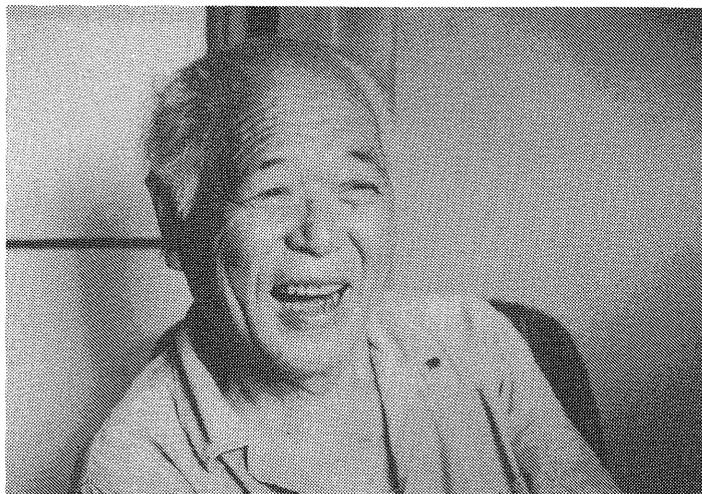
ひろば編集長

原 一美

前田さんは、八三年九月ひろばを発売するととても喜んでくれ、同種の構想が前田さんの周りで企画されていたのを抑え、協力を呼びかけてくれました。そうして翌年のひろば第一回サマーキャンプで村長となり、直後前田さんを発行人とする現体制を成立させることができました。

前田さんは汽車旅行が好きでした。

八七年一〇月一緒に下北—幌延の取材に行ったのですが、電車の窓から風景をずっと見えています。「生活がわかるから」と言うのです。話したくなる雰囲気があるのでしよう、乗り合わせた人と次つぎに話になります。生活についての質問から始まり、すぐ核心に入ります。国鉄民営化による羽幌線の廃止で高校への自宅通学が出来なくなること、幌延核廃棄物処理場建設に反対だが戦後開拓した農場と牛は自分の身体であり核廃棄物で汚染されても現在



の農場に踏みとどまることなど、降車まで討論は続きました。人民大衆の生活に限りない関心を持ち、闘いの現場に身を置こうとします。良いこと、大切なことと考えると、いきさつとかを度外視してすぐ身体を動

枚の紙をかざし、この絵には何が書いてありますかと尋ねたのです。すると父は、荒寥たる風景だと答え、療養士は重ねて同じ質問をし、父はもう一度同じ答えをする問答が何回か繰り返された末、とうとう父はそっぽを向いてしまい、その目にはかすかに涙さえ浮かべているようですし、相手は相手で困りきって、「これは前田さん、山でしょう、そしてこれは木が三本、そしてこれは道でしょう」と言うのです。私が見たところ、その絵は確かに紙の上部に山に見える曲線が三つ、紙面の左手に木を表わすものが三つ、その右手から中央にかけて消えていく二本の線は常識的には確かに道の絵になるのです。

でも父にとってはこれはまず絵ではないのです。図なのです。そして何を表わしているかと問われれば荒寥たる風景としか答えられないのです。そんな父を見るということは、物事を全体から捉え、本質を見る目を養えとの、私自身の思考のリハビリの日々であったのです。

かします。前田さんと向き合うと、激しく生きた者をもつ優しさなのでしようか、こちらの良い意志が認められる、心が通じる、励まされるのを感じます。第一回キャンプで『はとぼっぼ』を歌ったのを思い出しますが、いつまでも子供心を失わずひたすら革命を夢みた八三年でした。

前田さんの亡くなった今少しでも見習いたいと考えます。

「編集後記」

ひろばの発行人前田俊彦さんが、まさかの火事で亡くなった……。何等かの形で思い出を残したかった。が、実際に原稿を依頼し、前田さんの全てを形にするには、前田さんはあまりに大きく広すぎて、時間も力量も無き過ぎた。私自身が知る前田さんは、ひろばキャンプの「村長」であり、三里塚での前田さんでしかなかった。足りないところは、皆さんの思い出で補って頂きたいと思います。

合掌

ひろば通信スタッフ 小野博史

前田俊彦 略歴

- 1909年 9月17日 福岡県生まれ
中学卒業後、日本労働組合全国評議会系の労働組合で労働運動に参加
- 1931年 日本共産党に入党
- 1932年 治安維持法で逮捕、懲役7年の実刑で拘留される
- 1947年 2/1ストに際して、共産党から離党
- 1949年～54年 延永村（現行橋市）村長
- 1962年～ 瓢鰻亭通信発刊
- 1965年～ ベ平連の運動に参加
- 1970年 初めて三里塚を訪れる
- 1976年 6月14日 三里塚空港廃港要求宣言の会（現在は「要求」の字句はない）結成、代表となる
- 1977年 5月 5日 労農合宿所開設と同時に、合宿所に入る
- 1978年 瓢鰻亭を横堀に建設
- 1983年 夏 参議院選挙比例代表区に立候補（無党派市民連合）
- 1984年 1月 酒税法違反で国税局に起訴される
- 1984年10月 ひろば発行人に就任
- 1985年 1月11日 一過性脳虚血症で倒れる（於：瓢鰻亭）
- 1987年 1月 5日 脳梗塞で倒れる（於：自宅）
- 1989年 夏 P P21の企画で北海道の二風谷を訪れる
- 同 年10月15日 三里塚現地集會に参加する
- 1989年12月 どぶろく裁判最高裁判決（罰金30万円）
- 1990年11月 ピースポートに参加、世界一周の途中で倒れる
- 1993年 4月16日 自宅火災にて死亡（享年83歳）

フォトニュースひろば バックナンバー

- 1984年 7月 6号 この人に聞く
- 1985年 1月 9号 9・16被告、家族の憂うところなからしめん
- 1985年11月 14号 前田のじいさんが行く
「百姓の心を思うことのない農政 大潟村過剰作付」
- 1986年 5月 17号 名どぶろく「三里塚誉れ」千葉地裁罰金30万の判決
前田のじいさんが行く
「石垣島に資本の侵略を見た」
- 1987年 1月 21号 前田のじいさんが行く
「下北一幌延—三里塚 相通ずる百姓の魂」
- 1990年 1月 39号 帰ってきた前田のじいさん

著書

- 「瓢鰻亭通信 正・続」（土筆社）
- 「根拠地の思想から里の思想へ」（太平出版）
- 「ドブロクをつくろう」（編著）（農山漁村文化協会）
- 「ええじゃないかドブロク」（三一書房）

顧問 伊藤成彦 庄幸司郎 樋口篤三 編集長 原一美

編集・発行 ひろば編集委員会

〒116 東京都荒川区東日暮里 6-46-4

荒川住民ひろば ☎ 03 (3806) 4840

〒660 兵庫県尼崎市東難波町 5-8-12-202

尼崎住民ひろば ☎ 06 (482) 8297

郵便振替 東京 5-44637

年間購読料（送料共） 3,600円

発売元 ウニタ書舗